

元豪捕虜・抑留者の親族 英連邦墓地を訪問

市民交流会の翌日3月1日（金）午後、オーストラリアから招聘された元捕虜・抑留者の親族を含む4人の方々は、横浜市保土ヶ谷区の英連邦戦死者墓地を訪問し、犠牲の十字架に献花をした。POW研究会会員からは笹本、田村、村田、手塚、須佐、小宮がこの訪問を現地で歓迎し、ゲストの方々と交流しながら一緒に墓地を回った。オーストラリア大使館付き武官も凛々しい軍服姿で皆さんを迎えた。

当日は穏やかな晴天にめぐまれ、早春の英連邦墓地の空気は清々しく、冬枯れの芝生から新芽が萌え出ようとしていた。一行はオーストラリア区に足を運び、笹本さんによる説明（通訳田村さん）を興味深そうに聞いた後、用意された花束を十字架に奉げた。その後は各墓石を順に見て回った。ダイアン・ヒックさんとジェイン・レスリーさんの2人は、オーストラリア貨客船ナンキン号の客室乗務員で、福島市の抑留所で抑留中に亡くなったエリザベス・グリソンさんの墓石の前で足を止め、熱心に説明に耳を傾けていた。オーストラリア人女性という共通点から、ダイアンさんは虐殺された叔母のモナ・テイトさんを、ジェインさんはジャワで抑留された祖母リディアさんの運命を思い浮かべたのか



左ジェインさん、右ダイアンさん



献花を終えた5人

亡くなった幼子や、墓地の整備と管理に長年貢献した2代目墓地管理人レン・ハロップさんの墓石などの説明も聞いた。すべて同じ形式で建てられ、一見同じように見える墓石の一つ一つに、戦争につながる個人の歴史が詰まっていることに、POW研究会会員である私たちも思いを深くした。



エリザベス・グリソンさんの墓石

ロスさん、ヘンダーソンさんは昨日とは違いリラックスした服装で、盛んに写真を撮っていた。ジェインさんは、「私は家族の歴史に刻まれた戦争の影響を表現したいと思い、女優として活動しているの」と語った。これまで来日した元捕虜の方々と比べ一世代若い世代の方々にふさわしく、皆さんお元気で、翌日の直江津訪問を楽しみにされているようだった。

(小宮まゆみ)